

リベラリズムの教育論と愛国心教育

山村和世（東京大学大学院）

1 愛国心教育とシティズンシップ

2006年の教育基本法改正、2007年の学校教育法改正では「豊かな情操と道徳心」「公共の精神」「伝統と文化を尊重」といった文言が並び、愛国心や道徳心の強調が話題となった。また日の丸・君が代をめぐる問題も長く議論されている。教育現場における愛国心の強調がもたらす政治的効果については、その問題点を指摘する声も大きい（中川・西原 2007）。

一方、近年、関心の高まりを見せているシティズンシップ教育においては、「愛国心教育」を適切に位置づけようと試みる議論が見られる。イギリスの「クリック報告」では、「社会的・道義的責任意識の涵養」が三つの柱の一つとして位置づけられた。公共的な活発さ、正義の感覚、市民的礼節と寛容、連帯と忠誠の感覚、の四つの市民的徳性を、教育目標に掲げる論者もいる（kymlica 1999）。

すなわち「愛国心教育」の問題は、多元性を尊重するリベラルな政治社会において「公共性を支える市民的徳性」をどのように考えるべきか、という観点からも、検討を必要とする。本発表では「リベラル vs. コミュニタリアン」の論争軸に沿って「歴史教育による愛国心教育」をめぐる具体的争点を確認し、このテーマがもつ問題構造と射程を整理する。さらにそこでの論点は、日本の学校教育に対する評価的・分析的視点を得るうえで有益であることを示したい。

2 「徳性の涵養」か「批判的能力の涵養」か

まずは問題の構図を示そう。Galston (2002) は、リベラリズムの歴史的伝統において、理性や合理性を重視する「自律性」と、個人や集団の異質性を尊重する「多様性」との、二つの理念が存在することを指摘している。

そこで問題となるのが「自律」と「多様性」の両立不可能性である。人々が「自律的に」振る舞うためには、社会が自明とする様々な規範が批判的に吟味されねばならない。しかし理性的な批判的吟味を各コミュニティが支持するとは限らない。各コミュニティにとっては、社会の信念体系を揺るがしかねない、自律的な批判的吟味は、脅威となりかねないからである。

この問題が先鋭的に現れるのは「公教育」の領域においてである。社会内部における集団・コミュニティの多元性を尊重するため、リベラルな政治社会は「多元性を尊重する徳性」「批判的吟味に開かれた自律の能力」を、市民教育の徳目にすえる。だが、そのような「リベラルな市民教育」のプログラムは、多元的な各コミュニティにとっての「抑圧」となりかねない。

さらには別の問題もある。リベラルな政治社会は、果たして「自律の涵養」のみで安定的に維持できるか、という問題だ。「自律」の理念が、理性や合理性などの啓蒙主義の伝統に根ざすものならば、それだけでは「政治社会への市民のコミットメント」が不足するかもしれない。理性や合理性には還元されない徳性を「愛国心教育」や「歴史教育」が補完すべきではないか。ここで「徳性」の涵養か「批判的能力」の涵養かという対立が生じる。

3 歴史教育による愛国心教育

次に、問題を焦点化しておこう。Fullinwider (1995) は、市民的徳性の涵養にとって、歴史教育が有効であると説いている。歴史教育は社会制度について市民に知識を与え、歴史感覚も養成する。だが最も重要なことは、歴史がアイデンティティの感覚を醸成することだ、と彼は言う。政治社会への市民的コミットメントにおいて、歴史教育は重要な役割を担うのである。

その上で Fullinwider が注意を促すのは、「歴史教育」と「歴史研究」との区別である。歴史研究においては真実の探求が優先され、その効用は度外視される。しかし歴史教師にとっては事情は異なる。子供が良き市民となるためには、歴史教育は市民的徳性を資するうえで有益でなければならない。Fullinwider は、歴史教師は生徒に（歴史に対する）自己効力感を涵養せねばならず、時には「真実よりも嘘が人々の関心を引き出す」ということもありうるとする。

ここで浮上するのが、「市民的徳性の涵養」の実現のために「歴史」を機能主義的に活用することを許容できるか、という問いである。しかもその歴史が、真実以外のものを含んでいるとしたら、それは適切なのか。

4 歴史の機能主義的利用への評価（1）

コミュニタリアンの立場から、歴史の機能主義的利用を強く否定する論者に MacIntyre (1999) がいる。MacIntyre によれば、現代社会の政治社会は、道徳をめぐる根源的不同意を特色としている。ところが政治社会の次元では、このような不同意を覆い隠すかのように「道徳的レトリック」が日常的に流通しているという。

MacIntyre は、個人の徳性を涵養する教育において、このような「道徳的レトリック」次元での道徳的資源が活用されてはならない、と強く主張する。MacIntyre によれば、本来の道徳性とは、一貫した高度な体系性を備えたものであり、道徳教育においても、そのような高度な体系性が前提とされなければならない。レトリック次元の道徳論では、個人が道徳的判断を実践的に導くうえで役立たないのである。

だが MacIntyre の立論では、政治社会における市民的コミットメントの問題が残ってしまう。この問題について、政治社会の多元性を最大限に尊重しつつ、独自の解決を与えるのが Galston (1989) である。Galston は「合理的探求のみでリベラル社会の核となるコミットメントを引き出すことは望めない」のだから、レトリカルな「市民教育」が必要であるという。例えば、「高貴さによって、人々を道徳に向かわせるような歴史教育」が有益だとされる。

Galston の議論のポイントは、真理追求や合理性といった「自律」に資する教育目的を、ことごとく排除する点にある。前述のように「自律」は多元的なコミュニティにとって脅威であり、抑圧としての側面をもつ。Galston は「自律」を価値づけられないことで、コミュニティの多元性を尊重し、各コミュニティの信念体系を保持しようとするのである。そのうえで同時に、政治社会レベルでの信念体系（たとえば立憲主義の伝統）の存在にも Galston は着目する。政治社会次元での市民的徳性を涵養し、市民的コミットメントを実現しようとも試みるのである。

5 歴史の機能主義的利用への評価（2）

「自律」の理念を重視するリベラルの陣営は、この問題をどう見るのか。Galston の「市民教育」を「センチメンタルな市民教育」と批判的に名付け、「自律のための教育」を主張する論者に Callan (1997) がいる。Callan は、感情に訴えかけるような、道徳的に美化された歴史教育を肯定する Galston の処方箋は、歴史的想像力を貧困化させ、（現実の単純化と表裏一体の）判断力

の鈍化を導き、問題含みの保守主義に手を貸してしまうと述べる。さらに Galston が市民の政治的能力を悲観し、「エリート／非エリート」の区分を前提として、民主主義より代議制を優先させる点にも批判を投げかけている。

Callan によれば、代議制が適切に運営されるためにも、市民の批判的理性能力は不可欠である。さらに市民的コミットメントの面でも、Galston の処方箋では、政治制度への「忠誠」ではなく、単なる「服従的な習慣的態度」が帰結されかねないと批判する。

そこで Callan が構想するのは、批判的能力と市民的コミットメントを両立させるための歴史教育である。Callan は、歴史に立脚しつつも、そこから肯定的意味や方向性を引き出し、未来への改善点をも見出すような歴史教育のあり方が可能であると、哲学的論証を試みている。

だが Callan は「穏和なパトリオティズム」を肯定的に前提としている。この点を鋭く批判するのが、Brighouse (2007) である。Brighouse は、国民国家への忠誠や同一化を促すように学校教育が活用されることを徹底的に否定する。

愛国心は「リベラル国家の安定性」に貢献するとの見解を批判して、Brighouse はパトリオティズムが他国に対する優越感情を含むこと、個人にとって国家が奨励する文化的基準は強制性を持ちうることを挙げる。さらに愛国心が「配分的正義」に寄与するという見解を批判して、保守勢力が「愛国心」を利用し、「（労働者階級の）階級的忠誠心」に干渉したイギリス労働運動史を挙げている。すなわち愛国心は、国家以外の集団に対する愛着と緊張関係に立ちうる。愛国心教育はたとえリベラルで穏和な外観であったとしても、警戒されるべきなのである。

6 着目すべき論点

以上に見た論点は、日本の学校教育の社会学的分析においても、いくつかの有益な分析的・評価的視点を与えるものと考えられる。たとえば徳性の涵養がいかなる形で実施されているか、あるいは、志水 (2002) 等の学校文化研究の知見に照らして「批判的能力／徳性」の教育をどう評価できるか。さらに、公教育に対抗する社会主体という観点も重要となる。教育権をめぐる日本独特の歴史的文脈において「愛国心教育」はいかなる影響を持ち、そのような教育プログラムをどのように評価できるのか。加えて、後期近代社会における学校教育の役割についても、一定の観点が得られるものと思われる。